

## 林紓と「文学革命」

吉 川 榮 一

はじめに

林紓は官界ではついに志を得ることはできなかったものの、数多くの外国文学の翻訳を通して清末民国初の知識人に大きな影響を与えた。例えば、郭沫若は自伝の中で次のように記している。

林琴南が訳した小説は当時非常に流行しており、これも私が好んだ読み物だった。私が最初に読んだのはハガードの「迦茵小伝 (Joan Haste)」だった。……中略……「迦茵小伝」には訳本が二種類あり、林琴南訳が後のものだった。前のものは半分しか訳してなかった。この両方とも私は読んだが、おそらくこれが私が西洋文学を読んだ最初のものだったろう。これは西洋文学史の上では何の地位もないものだが、林琴南のあの簡潔な古文で訳されると少なからず輝きを増していた。……中略……

林訳小説の中で、私の後の文学的傾向に決定的影響を持ったのは、スコットの「アイバンホー」だった。彼は「撒客遜劫後英雄略」と訳していたが。この本を私は後に英文で読んだことがある。彼が誤訳したところや省略したところは少なくないが、あのロマンチズムの精神は彼が生き生きと示してくれたのである。<sup>(1)</sup>

郭沫若のこの回想は、彼が十代半ばだった1907年前後を振り返ってのものである。郭は林紓という古文の大家の翻訳を通して西洋文学に触れ、それが彼の精神形成に大きな影響を与えたことを率直に吐露している。郭は林訳小説の影響について、「幼いころ頭に刻み込まれた感銘は、古道についた車のわだちの

ように、なかなか消えないものだ。」<sup>(2)</sup>と感慨深げに回顧しているが、こうした思いはひとり郭のみならず清末民初に青年期を過ごした中国知識人に共通するものであろう。鄭振鐸は翻訳家林紓の功績について次のように記している。

中国のこの二十年の小説翻訳者の多くは、そのほとんどが林先生の感化と影響を受けていると言っても差し支えあるまい。周作人先生は彼の翻訳集『点滴』の序文で、「私の以前の翻訳は、林琴南先生の影響を受けている」と述べているが、周先生や他の翻訳者ばかりか、小説創作者もまた林先生の影響を多分に受けているのである。<sup>(3)</sup>

しかし、数多くの文学者に大きな影響を与えた林紓は、新しい文学運動が湧き起こる中で批判的となっていく。林紓は1917年に始まる文学革命の中で真っ先に槍玉に挙げられ、やがて静かに歴史の舞台から退場していったのである。本稿では、林紓をめぐる当時の状況と、新旧の論戦に決着をつけた蔡元培の言動の分析を通して、林紓にとって文学革命とは何であったのかを明らかにしていきたい。

#### 一 文学革命派の林紓批判

胡適の「文学改良芻議」、陳独秀の「文学革命論」が相継いで発表された1917年初頭以来、《新青年》誌上には通信欄を中心として、ほとんど毎号「新文学」をめぐる文章が掲載されている。特に上述の胡適、陳独秀に加え、錢玄同、劉復らが盛んに文言を用いた文学を批判し、白話を用いる新文学の提唱に努めた。彼らが主たる攻撃目標に定めたのは、桐城派の散文と選体の駢文であったが、如何せん、これら旧文学派からの反撃は無きに等しく、新文学の提唱に対しては、ほとんどこれを黙殺するがごときであった。林紓と並ぶ古文の大家と目されていた嚴復の次の言葉が、この間の事情の一端を物語っている。

北京大学の陳(独秀)、胡(適)ら教員が言文一致(原文:文白合一)を主張していることは、北京で既に久しく耳にしている。彼らがそう主張

するのは、西洋がそうだからというわけである。しかし彼らは、西洋では話し言葉を書き言葉に近づけようとしたことを知らず、逆に書き言葉を話し言葉に近づけようとしている。……中略……もし白話をもって教育に当たれば、普及は容易であるが、周鼎を棄てて、壊れた壺を宝とするようなもので、退化以外の何物でもない。こうしたことは全て天演に属することを知るべきである。革命の時代にあつては、新学説が数限りないが、これを社会で実践すれば、優れたものは自ずから残り、劣ったものは自ずから滅びる。たとえ千人の陳独秀、一万人の胡適、錢玄同がいようと、この趨勢を曲げることはできない。だから、春の鳥、秋の虫と同じで、鳴きやむまで勝手に鳴かせておけばよいのだ。林琴南の如きが彼らと論争したなどというのは笑止千万な話だ。<sup>(4)</sup>

その訳著『天演論』で中国に進化論を伝え、清末知識人を震撼させた嚴復ではあったが、彼はあくまでも古文の優越を信じて疑わず、言文一致の動きもいずれば淘汰の列に加わるに相違ないと確信していたようである。だからこそ、新文学の提唱など取るに足りぬ些事として相手にせず、新文学提唱者らにむきになって論戦を挑んだ林紓を冷笑せずにはいらなかったであろう。おそらく文言を支持していた大方の知識人たちも、白話の提唱は一時的なものにすぎず、文言の優位性は揺るぎないと考えていたに相違ない。

新文学対旧文学の論戦を冷笑的な態度で傍観していたのは、旧文学を支持する人々ばかりでなく、新文学に向かう趨勢を是としていた人々の中にもいた。例えば、上海の《時事新報》副刊《学灯》は当時多くの青年に愛読されていたが、この《学灯》の中心的執筆者である張東蓀は、白話や新文学が将来主流になるのは自明のことなのだから、ことさら無益な論争を旧文学派に挑むことはないとして、次のように書いている。

現在の中国の情勢は、新道德・新思想・新文芸の導入に対する要求が非常に切なるものであることはおそらく誰もが理解していることだろう。

しかし一部の人々は、この導入に努めているとはいふものの、新道德・

新思想・新文芸をより多く導入しようとするのではなく、もっぱら旧道徳・旧思想・旧文芸を打倒しようとし、ひたすら非難痛罵の文章ばかり書いている。

私は、かかる状況は新陳代謝の道理と甚だ合致していないと思う。譬えて言うなら、瓶の中に充満した古い空気を新しい空気に入れ換えようというとき、一日中その瓶を揺すぶっていたところで古い空気は相変わらず出ていかないと同じことだ。だから、もし我々が中国はいま新道徳・新思想・新文芸を必要としていると考えるのであれば、極力それを導入すべきなのであって、旧道徳・旧思想・旧文芸に戦いを挑む必要などはないのだ。なぜなら、それは自然に消滅していくはずだからである。<sup>(6)</sup>

すなわち、《新青年》の同人たちが熱心に取り組んでいた「文学革命」キャンペーンは打倒すべき対象からは黙殺され、援軍たるべき人々からは冷笑され、後述するように卑劣な誹謗中傷だけが加えられるという状況に立ち至っていたのである。こうした沈滞した空気を何とか打ち破ろうとしたのが、錢玄同と劉復の架空往復書簡——「文学革命之反響」であった。この書簡が取り上げたのは林紓だけではなかったが、林紓に対してはとりわけ辛辣で挑発的であった。

林先生の翻訳した小説は、もし「娯楽読物」としてみたならば、攻撃する必要のない代物です。……中略……しかし、もし文学として評すなら、正直なところ、たとえ林先生の著作が「およそ百作品」が「およそ千作品」であろうと、文学的価値のかけらさえありません。なぜなら、彼が翻訳した書物は、まず第一に原本の選択が杜撰で、往々にして海外の極めて価値のない著作を訳出し、真の好著は——あるいは基準がないのか——取り上げたことがないからです。あなたのおっしゃる「周鼎を棄て、壊れた壺を宝とする」とは、まさしく林先生の訳書に対する絶妙の評語です。第二に、誤譯が極めて多く、訳本と原本を対照すれば、削るところは削り改変するところは改変して「（原著の）精神は全て失われ、内容が全く別物になっている」からです。<sup>(7)</sup>

林紓を崇拜する架空の読者への返信という形を借りて、林紓の翻訳には文学的価値がまるでないだけでなく、その翻訳が間違いだらけで、『林訳小説正誤記』が編めるほどだと散々にこき下ろしている訳である。引用部分以外にも、鳩摩羅什の仏典翻訳を引き合いに出して林紓を皮肉ったり、林紓の無知を嘲ったりしてしている。

実は、『新青年』誌上での林紓批判はこれに始まるのではなく、文学革命開始直後にまでさかのぼることができる。胡適の「文学改良芻議」を擁護すべく錢玄同が陳独秀に送った書簡の中で、錢は次のように林紓をくさしている。

某氏の如きは、西洋の小説を共訳するに際し、専ら『聊齋志異』流の筆致を用い、その一方で韓愈・柳宗元を引いて自分に箔を付けようとしていますが、その価値たるや桐城派以下であります。にもかかわらず世人は夙にこの人物を大文豪と目しているのです。<sup>(8)</sup>

胡適もまた、陳独秀宛の書簡の中で林紓に対する失望をあからさまにしている。

先頃、林琴南先生が最近書かれた「論古文之不當廢」を読みました。さだめし我々古文を攻撃している者の研究に供するに足るものと思ひ、喜んで読みましたが、あにはからんや大いに失望いたしました。林先生の言うには、「ラテン語を廢すべきでないなら、司馬遷・班固・韓愈・柳宗元もまた当然廢すべきでないことがわかる。小生はその道理を知っているが、そのしかる所以を言うことはできぬ。これは古を好む者の癡癖である。」とのこと。「その道理を知っているが、そのしかる所以を言うことはできぬ」とは、まさしく古文家の悪癖です。古文家の文章というのは、全て他人の文章を熟読し、その語調口吻を会得することに始まります。長い間とことん熟読しているうちに模倣できるようになるのですが、その「しかる所以」は何とわからないのです。これでは蓄音器のようなもので、録音さ

れた人の口吻語調どおりにそっくりそのまま真似ることはできるにしても、所詮は一個の機械であって、「そのしかる所以を言う」ことはどうしてもできないわけです。……中略……林先生は古文の大家ですが、その大家をもってして、「古文を廃すべきでない」ことを論じて、「そのしかる所以を言うことができぬ」のだとすれば、それこそ古文はまさに廃止すべきであることは明々白白ではありませんか。<sup>(9)</sup>

胡適はまた、「文学革命之反響」掲載の翌月、《新青年》の巻頭を飾った「建設的文学革命論」の中でも、桐城派の古文などは打倒する価値すらなく、そのような「ニセ文学」「死んだ文学」は自然と消滅するだろうとまで言い切っている。<sup>(10)</sup> 彼は、西洋文学の翻訳について論じた中で、林紓については次のように嘲笑している。

古文を用いて翻訳すれば、原文の良さは必ず失われる。林琴南の「其女珠、其母下之」という訳の如きは早くからお笑いぐさになっており、論ずるまでもない。……中略……林琴南がシェークスピアの戯曲を記叙体の古文で訳出したのは、まさにシェークスピアの大罪人と言うべきだ。<sup>(11)</sup>

このように、文学革命開始以来《新青年》誌上で繰り広げられた様々な議論の中で、林紓は当初から打倒すべき対象として衆矢の的となっていたのである。とりわけ、先に挙げた「文学革命之反響」あたりから林紓に対する攻撃は激しさを増し、彼の存在意義そのものを否定するがごとき論調が現れてきていたのである。

## 二 林紓と「文学革命」

周知のように、林紓は清末民国初の古文の大家として世間の尊崇を集め、また自らもそう自負していた人物である。彼は1899年に『巴黎茶花女遺事』（小デュマ『椿姫』）を世に送り出して以来、二百近くの外国文学を翻訳し、一世を風靡した。彼自身は外国語を知らなかったが、共訳者の口述した西洋文学作

品は、「林琴南のあの簡潔な古文で訳されると少なからず輝きを増し」、これまで中国の伝統的な文学しか知らなかった数多の青年をとりこにしたのである。青年たちは、林紓の翻訳を通して西洋人の生活を垣間見、中国文学にはない清新なものをそこに感じ取った。西洋には文学と呼べるものなどないと考えられていたような時代に、林紓は西洋文学を中国に紹介し、西洋文学にも中国文学に勝るとも劣らぬものがあると、その価値を宣揚したのである。林訳小説によって西洋文学に眼を開かれた「文学革命」の担い手たちから、その林紓がまず打倒すべき敵として意識されたことは、何とも皮肉な歴史の巡り合わせである。

もっとも、西洋文学を広く中国に紹介した林紓自身は、西洋文学と中国文学との相違からあまり学ぶところはなかったようである。これは林紓ひとりに限ったことではなく、清朝末期という変革期に生まれあわせたほとんどの「文人」に共通する悲劇であった。中国の伝統的な学術・教養を叩き込まれて育ち、その中に自己のアイデンティティーを見出していた文人たちにとって、古典の否定は自らの拠って立つ基盤の否定であり、それはとりもなおさず自己の存在価値そのものの否定でもあった。古典は彼らにとって絶対的な存在だったのである。だからこそ、林紓はあれだけ大量の翻訳をしながら、西洋の書物に書かれていることは全て中国の古典の中にあると自得し、中国古典の優位性を確認するのみで、それを疑ってみることはついになかった。彼が「文学革命」に人一倍敏感に反応したのも、このゆえであろう。まさに増田渉氏が書いておられるとおり、「彼は古文家のチャンピオンを自任し、ここに彼自身の存在の意味を自覚していたようだ。……中略……だから外国に留学して、外国語をよみ、直接外国文化を経験した人々が、異質のエネルギーを吸収して帰り、自国の伝統をまず否定するところから出直して、新しいものを生み出そうとした『文学革命』が、彼にはどうしても理解できなかった。理解しようとするより前に、それを反逆としてしか受けとることができなかった<sup>(13)</sup>」のである。しかも、すでに見てきたように、「文学革命」の狼煙が上がって以来、林紓は胡適や錢玄同から名指して批判されてきたのであって、こうした批判を受けて立つよりほかに、林紓のとるべき道はなかったといつてよい。当時の彼の言動にはあまり感心できないものの、彼が「文学革命」の反対者として立ち現れるに到った経過

そのものは些か同情の余地があるようにも思う。

さて、「文学革命」に対する林紓の最初の反応は、1917年2月に《民国日報》に発表された「論古文之不當廢」であるが、すでに触れたとおり、これは反論の体をなしていなかったようであり、いたずらに胡適の嘲笑の種となってしまう。その後しばらく沈黙を守っていた林紓が反撃を試みたのが、「論古文白話之相消長」である。この論文の要点は、

要するに書を読み世間をよく知って初めて文章を書くことができるのであって、中身の無い人間には古文を書くことができないだけでなく、白話文も書くことはできないのだ。……中略……ゆえに昔気質の先生が文字には根柢がなければならぬと言うように、古文は白話の根柢であり、古文なくしては白話はないのだ。<sup>(14)</sup>

ということであった。残念ながら、古文が根本だというだけでは、あまり説得力のある反論とは言えない。やはり、林紓には「文学革命」の目指すものが何であるかをよく理解できなかったのである。教養のない一般庶民に白話を普及しようと言うのであれば、かつて白話新聞に執筆した経験のある林紓にも理解できた。しかし、「全国の模範」たるべき大学の教員ともあろう者が、古文の価値を否定し、知識人であれ一般庶民であれ等しく白話を使おうと提唱するなど、彼の理解をはるかに超えていた。林紓にしてみれば、文章の全面的な白話化など、ありうべからざる価値の顛倒と思われたに相違ない。

林紓はついに古文の優位を証明することはできなかったが、そもそも彼にとってそれは自明のことであって、証明する必要などないものだったのであろう。だから彼は、古文の優位性を問われても、「小生はその道理を知っているが、そのしかる所以を言うことはできぬ」と言うよりほかなかったのである。この「論古文白話之相消長」の中にもその兆しがあるが、十分に反駁できぬ彼の苛立ちともどかしいさはその後、自分を批判した者たちに対する人身攻撃として表現された。



今もしことごとく白話をもって言うならば、恐らく浙江・安徽の白話は、もとより直隸の白話の美しさにも及ばないのではあるまいか。<sup>(15)</sup>

「論古文白話之相消長」の末尾に書き添えられているこの言葉は、浙江省出身の錢玄同・魯迅・周作人・蔡元培らと、安徽省出身の胡適・陳独秀をそしめるものであった。「直隸」は今の河北省、白話の基準である北京語が話されていた地域である。つまり、新文学を提唱している連中の白話など大したものではないのだと林紓も一矢報いているわけである。

蔡元培は北京大学校長に就任して以来、新たに多くの教員を招いたが、その中には少なからぬ浙江・安徽省出身者がいた。これは尾坂徳司氏も指摘するとおり、これらの地方が比較的早くから開化されていたことと、蔡元培にも当時はこの程度の狭い交友関係しかなかったことによるのであろう。北京大学内に自己の派閥を形成しようという意図が蔡元培にあったとは、彼のその後の行動から見て到底思われない。しかしながら、地縁・血縁が大きく物を言った当時の中国社会においては、蔡元培の行った人事も、人々の不信や反発を招くに充分であったと言わざるを得ない。そこに自ずから誹謗中傷を生み出す土壌があった。林紓の言葉の端々からも、当時の白話をめぐる論争が、純粋に真理を追究しようとしただけのものではなく、水面下で猜疑や反目の渦巻く、かなりどろどろとした闘争であったことが窺われる。林紓の発表した文言小説「荊生」はその一例である。<sup>(17)</sup>

「荊生」は、陳独秀、胡適、錢玄同になぞらえた田其美、狄莫、金心異の三人が孔子や文言を罵っていると、一人の偉丈夫・荊生が現れて、その三人を散々に懲らしめるといふ、他愛もない内容の小説である。しかし、これは単なる腹立ちまぎれの戯れ言ではなく、一種の脅迫めいたメッセージとして読者に受け止められた。「荊生いづくにかあらん」という偉丈夫登場を待望する林紓の言葉が、安福系の有力者徐樹錚に向けて発せられたものと理解されたからである。<sup>(18)</sup>

徐樹錚は段祺瑞の腹心であり、段が陸軍総長の時には陸軍部秘書長ついで陸軍次長、段が国务院総理となると国务院秘書長となり、常に段の懐刀として政治の中枢にあった。「小扇子軍師」徐樹錚の名は、安徽派軍閥第一の知将とし

て当時轟いていたのである。<sup>(19)</sup>彼は、軍人政治家には珍しく学問を好み、桐城派文人をもって自ら任じ、1914年に正志中学を北京に創設すると、翌年にはかねて師と仰いでいた林紓を古文教員兼教務長として招いている。一方の林紓も、徐が古文を尊び、「善本を選んで刊行し世に問う」<sup>(20)</sup>ていることに感謝していた。林紓は必ずしも軍閥統治に賛成していたわけではなく、政治からは常に遠くに身を置いていたようであるが、<sup>(21)</sup>世間はそうは受け取っていなかった。それゆえ、「荊生」が発表されるや、それが徐樹錚に対する決起の呼びかけであり、新文学提唱者たちに対する恫喝として意識された。理論面で新文学提唱者たちに太刀打ちできなかった林紓の搦め手からの攻撃と理解されたわけである。実際、当時徐樹錚が黒幕となっていた政治団体・安福倶楽部は、新文化運動の進展が彼らの政権基盤を揺るがしかねないことを恐れ、次第に文化面への干渉を強めてきていた。こうした折も折発表された「荊生」は、林紓の鬱憤晴らしにとどまらぬ「生臭さ」を伴っていたのである。

林紓をはじめとする旧文人たちが徐樹錚に働きかけて新文化運動を弾圧しようとしたことについて、陳独秀は当時こう記している。

林琴南が《新青年》に恨みを抱いたのは、彼らが孔教と旧文学に反対したからだ。……中略……彼が崇拝し待望したあの偉丈夫荊生は、孔夫子が会おうとしなかった陽貨の如き人物なのだ。<sup>(22)</sup>

林紓はもともと軍人の力を借りて新派の人々を圧倒しようと考えたのだが、残念ながら彼の偉丈夫は彼のために断を下してはくれなかった。彼は恥ずかしさのあまり怒り心頭に発し、国会に弾劾案を提出して教育総長と北京大学校長を弾劾するよう、同郷の国会議員に働きかけているそうである。<sup>(23)</sup>

徐樹錚は結局動かなかった。しかし、安福系が権勢を振るう当時の北京において、軍人が乗り出して来るぞという脅しは、かなりの現実味を帯びて受け止められたに違いない。「荊生」発表まもないころ、前述の《学灯》は「為駆逐

大学教員事鳴不平」という記事を載せ、政府の圧力で陳独秀・胡適ら四教授が大学を追われたという消息に対して抗議の声を挙げている。四教授追放は事実ではなかったが、そうした事態が起りかねないという認識があればこそ、このような記事が掲載されたのである。先に触れたように、《学灯》は、新旧論戦に対して傍観者の立場に終始していたが、その《学灯》さえ新文学の前途を憂慮せざるを得ないまで緊迫した状況に立ち至っていたと見て差し支えあるまい。

当時は安福系が政権を牛耳っていた。デマが異常に多く、政治勢力が北京大学に干渉するという噂をばらまく者がしばしばいたし、陳独秀・胡適が北京から追放されるという風説もたびたび流れた。もし「五四運動」が起こっていなかったなら、こうしたデマが現実のものとなっていたかもしれない。<sup>(24)</sup>

鄭振鐸がこう回想しているように、北京大学に対する攻撃は次第に緊迫の度を高めていた。陳独秀、胡適、錢玄同など新文学提唱者たちの多くは北京大学の教員であり、北京大学が新文学派の牙城と目されていたからである。そして、この攻撃の矢は、校長たる蔡元培に集中していった。その急先鋒がほかならぬ林紆である。林紆は、以上のような状況の下で、彼らを「野放し」にしている蔡元培の責任を追及してきたのである。

### 三 林紆と蔡元培の応酬

1919年3月18日、「請看北京学界思潮變遷之近状」と題された記事が、林紆の蔡元培宛書簡とともに、安福系の御用新聞と目されていた《公言報》に掲載された。記事ではまず、蔡元培の北京大学校長就任以来、北京大学の気風が一変し、とりわけ文科では陳独秀をリーダーとする新文学派が「文学革命」を鼓吹し、旧文学・旧思想を排撃してやまぬと書いている。ついで、これに対抗する劉師培・黃侃ら旧文学派を紹介し、両者の中間派として朱希祖に触れている。北京大学教員をこのように大きく三派に色分けした上で、記事は次のように結

ばれている。

陳独秀・胡適らの新文学の提唱は単に旧文学を全て抹殺するのみならず、旧道徳を絶対的に否定し倫常を破壊し孔孟を譏り、さらには中国語を廃してフランス語を国語とせよとまで主張する。その支離滅裂たること実に甚だしい。さきごろ林琴南氏が蔡子民に送った書簡は、堂々千言、学界の前途に深い憂慮を示している。以下にその原書簡を掲げる。読者諸氏は最近の学風変遷の激烈を知るであろう。<sup>(26)</sup>

要するに、《公言報》記者は一見公平な立場を装いながら、実は林紓の書簡のいわば露払いをしているのである。そもそも林紓の書簡なるものは、実際には蔡からの返答を期待したものではなく、最初から詰問状として《公言報》誌上に掲載されたものであったようだ。<sup>(27)</sup>

林紓の公開書簡の要点は次のようなものである。

- (1) 大学は全国の模範であり、常軌を逸した道理に合わぬ議論を恣にしてはならない。
- (2) 孔孟を覆し倫常を損なう主張をする輩がいるが、孔孟を知らぬ外国人といえども五常に背くようなことはしない。
- (3) 「死んだ文字」が「生きた学術」を妨げるというが、科学が古文を用いなければ、古文が科学を妨げることもない。
- (4) 中国弱体化の責任を孔子に帰することは不合理だ。
- (5) もしことごとく古典を廃して土語を用いて文を書くのであれば、北京天津の物売りは誰でも教授に採用していいことになる。
- (6) 万卷の書を読破しなければ、古文はもとより白話文も書くことはできない。
- (7) 古典を学ぶには原文で読まねばならず、だとすれば古文を廃することはできない。
- (8) 新道徳なるものを唱える輩がいるが、彼らは不倫不忠の言説を唱える者であり、知識人の模範たる大学教員にふさわしくない。

一年前には、「悠々百年、自ずからよくこれを弁ずる者あらん」と大見得を切って、古文の優位性は論ずるまでもないと豪語していた林紵であったが、自ら出馬して「白話の是非」を論ずる羽目に陥ったのである。「文学革命」の浸透と、自分に対する度重なる挑発に、林紵はもはや黙ってはいられなくなったのであろう。彼の苛立ちがもっともよく感じられるのは次の一文である。

もしことごとく古書を廃して土語を用いて文章を書くのであれば、都下の「引車売漿之徒」の使う言葉はみな文法を有し、福建人広東人の文法のないおしゃべりとは違うということになり、北京天津の物売りはみな教授として採用していいことになります。<sup>(28)</sup>

魯迅はこの「引車売漿之徒」が蔡元培の父を引き合いに出して罵っているのだと明らかにしている。

(こんな事は林琴南氏が白話を攻撃した時の文章中に有る話)(「引車売漿」とは車を引き豆腐漿を売る事、蔡元培氏の父を指す。あの時、蔡氏は北京大学校長で矢張白話を主張した一人で、故に、矢張、攻撃の矢を受ける)<sup>(30)</sup>

実際には蔡元培の父親は両替商の支配人であり、豆乳売りだったというのは事実ではない。<sup>(31)</sup>このことは蔡元培と親しかった同郷の魯迅が知らぬはずはなく、「車を引いて豆乳を売る商人」と書いて蔡元培の父を貶めている林紵の意図を暴露しているのであろう。<sup>(32)</sup>林蔡の応酬の少し後になるが、新文化運動を攻撃した思孟が「息邪(一名北京大学鑄鼎録)」中の「蔡元培伝」において、「蔡元培、字は鶴脚、浙江紹興の人。父某、豆乳売りを職とす。」<sup>(33)</sup>と記している事実もある。これらのことは、当時、蔡元培をめぐるこうしたデマが飛び交っていたことをよく物語っている。

もう一点、林紵が「福建人広東人の文法のないおしゃべり」と言っているこ

とも見逃すべきではない。すなわち、白話で文章を書くということになれば、御尊父のような「引車売漿之徒」の言葉は文法にかなった素晴らしいものでありましょうが、福建生まれの私や嚴復氏のような者の言葉は取るに足りぬつまらないおしゃべりでございましょう……と林紓は言っているのである。当時の「論争」なるものの凄まじさを思い知らされる。父親を引き合いに出して相手を罵るというのは、かなり悪辣なやり口と言わざるを得ないが、林紓はこの手の筆法を得意としていた。同じころ発表された文言小説「妖夢」でも、蔡元培に対するかなり手厳しいあてこすりを行なっている。

地獄を舞台とするこの「妖夢」は、白話を尊び孔孟・倫常を譏る「白話学堂」の校長・元緒(蔡元培を指す——引用者)、教務長・田恒(陳独秀を指す)、副教務長・秦二世(胡適を指す)の三人が、阿修羅王に喰われて糞にされるという途方もない筋の小説である。<sup>(34)</sup>この中の「謙謙たる一書生」と形容される「白話学堂」校長・元緒が北京大学校長・蔡元培をあてこするものであることは明らかである。もともと「蔡」という漢字には「大亀」という意味があり、「元緒」という言葉もまた「大亀」を意味しているからである。<sup>(35)</sup>しかし、亀が罵語に用いられ、「元緒公」が遊女屋の客引きを意味した当時の中国においては、これは大変な侮蔑であった。林紓が「妖夢」の中でかくも陋劣な表現をしていることからわかるとおり、蔡あての公開書簡なるものも、実のところ憎悪を行間に織り込んだ文章にほかならない。

さて、林紓からの挑戦に対して、蔡元培は直ちに返答を送り、同時にこれを《北京大学日刊》(3月21日)に公表した。<sup>(36)</sup>この日の紙面のほとんどを林紓関連の記事に費やす力の入れようであった。蔡元培は林紓の自分への人身攻撃など知らぬ気に、穏やかな態度で林紓への反論を開始している。彼は林紓の批判を次の二点に集約する。

- (1)孔孟を覆し、倫常を損なうことについて
- (2)ことごとく古典を廃して土語を用いて文章を書くことについて

第一点は、林紓側の批判(2X4X8)に対応する回答であるが、蔡は「孔孟を覆す」と「倫常を損なう」ことを分離し、さらにそれぞれについて大学内と大学

外を分けて論じている。林紓にとっては、「孔孟を覆し、倫常を損なう」ということは一体であり、両者は分かつことができないものであった。それをこうして別々にされてしまうと、林紓の批判はほとんど意味を失ってしまう。また、学内の講義と学外での言動を峻別して扱うことは、林紓としては承服しがたいことであったに違いない。

蔡はまず「孔孟を覆す」説について、学内でそのような主張をする者はいないと一蹴し、学外における活動は本来大学と関係のないことであり論ずるまでもないと前置きした上で、「孔教会」を批判した者はいても、孔子そのものを直接批判したのではないと、林紓の批判をかわしている。ついで、「倫常を損なう」説について、「民国」である以上、君臣関係は論外だと切って捨て、学内で倫常に背く講義がなされていないだけでなく、「進徳会」という学内団体の基本戒律は孔孟以上に厳格だと反論する。学外については、いったいどの教員が「倫常を損なう」言説を世間に公表したのか証明してもらいたいと反問している。

第二点については、

(甲) 北京大学がすでに文言を全廃して白話だけを用いているか。

(乙) 白話が果たして古典の意味を伝えうるか。

(丙) 一部教員の提唱する白話文が、豆乳売りの言葉と同じであるか。

の三つに分けて回答している。これは林紓側の批判(3)(5)(6)(7)に対応している。

(甲) については、実例を挙げてこれを退け、(乙) については、白話で古典を講述するのは今に始まったことでなく、大学がそのやり方を踏襲して何ら不都合はないと答えている。(丙) は毒のある林紓の非難に答えたものであるが、蔡元培もやや皮肉を効かせてこう切り返している。

白話と文言は、形式が異なるだけで内容は同じです。『天演論』『法意』『原富』等は原文はみな白話ですが、嚴幼陵君が文言で翻訳したのです。小デュマ、ディケンズ、ハガード等の書いた小説はみな白話ですが、貴下が文言で訳されたのです。貴下や嚴君の翻訳が原書より優れていると、貴下は言えますか。内容が浅薄であれば、学校の答案や一般の新聞の社説は

一説にも値しません。それでも白話に勝るといえるのでしょうか。<sup>(37)</sup>

内容が肝要なのであって形式は副次的なものだと蔡は述べているのであるが、名訳をもって聞こえた林紓の翻訳を引き合いに出しているのは、少し意地が悪い。また、古文がうまく書けないから白話を用いるのだと言わんばかりの林紓に対して、胡適・錢玄同・周作人らがいずれ劣らぬ古文の使い手であることを例に挙げて反論し、彼らの名誉を守っている。

このように蔡元培は林紓の批判に一つ一つ論駁し、不当な誹謗中傷から北京大学とその教員を守ったのである。彼は書簡の最後に、大学のあり方についての持論を開陳しているが、これは林紓に向けてと言うより、北京大学の教員および学生に対して、改めて決意表明をしているように見える。蔡の主張は次のごとく要約できる。

- (1)「思想の自由」の原則を堅持し、「兼容併包主義」により、いかなる学派であろうと、根拠ある議論であれば、その自由な発展に任せる。
- (2)教員は学識第一であり、学外での言動は全て自由であり大学は干渉もしないが、代わって責任を負うこともしない。

これは従来からの蔡の主張の繰り返しに過ぎないが、北京大学をめぐるさまざまなデマがとびかい、蔡自身に対しても有形無形の圧力が加えられていた中でこの発言は、外部からの圧力には決して屈しないという決意を天下に宣言したに等しい。<sup>(38)</sup> 蔡元培は後年この顛末について自らこう総括している。

中国にはもともと思想の自由の伝統がなく、常に好んで自派をもって他派を抑えつけ、自説に執着し(他派に)嘲弄を加えてきた。ついに林琴南君は詰問の書簡を発表したので、私は道理に基づいてこれに答えた。その往復書簡は各紙に掲載されたので、国民は自ずから公平な評価を下した。<sup>(39)</sup>

蔡元培は思想の自由を堅持するという立場を貫き、林紓からの批判を逆に利用して、旧文学派の謬論を退けたのである。<sup>(40)</sup>



#### 四、林紓と蔡元培

1898年から1901年にかけて杭州に滞在していた林紓は、同じく杭州で教育に従事していた蔡元培と交流があった。当時蔡元培は、旧式の学校である求是書院を新しい師範学堂に改めんと尽力しつつ遂に果たせず、落胆していた。<sup>(41)</sup> 林紓は、この若き日の蔡元培に非常に同情的であった。1901年に書かれた書簡の中で蔡についてこう記している。

このところ蔡鶴卿太史は師範学堂創設に尽力していましたが、汪柳門、樊介軒の二人に阻まれました。このお二人の心ばえが那邊にあるやは存じません。……中略……蔡公は新進の士であり、如何ともできません。時折私の寓所を訪れ、二人でため息をつくばかりです。私はよそから来た身であり、樊楊諸君のことはよく知っているものの、結局はあらぬ疑いをかけられても困るので、敢えて口は挟みませんでした。<sup>(42)</sup>

当時、林紓は49歳。進士となる夢破れて、官吏としての栄達をあきらめた時期である。一方、蔡元培は当時33歳。翰林院庶吉士という栄達の道を自ら棄て、教育界に身を投じてまもないころである。当時の二人はともに、失敗に終わった戊戌変法運動に同情的な立場にあり、祖国の再生を願う思いは一つであった。しかし、林紓は外国文学の著名な翻訳者として名を挙げたのちも、中国古来の伝統文化を擁護しつづけ、中華民国成立後は清朝の遺臣をもって自ら任じていた。一方蔡元培は、革命運動の指導者から新文化運動の庇護者、教育界の重鎮へとその存在感を大きくしていく。林紓があくまで中国の伝統的思想や文化に固執し、新しい思想や文化の発展を阻んで、時代から取り残されていったのに対して、蔡元培は伝統的な思想や文化には十分な敬意を払いながらも、敢えてその羈絆を断ち切るところから中国の再生が始まると考えたのである。彼は、新しい思想や文化の誕生を喜び、身を挺して新しい世代のために道を拓きつづけた。1919年の林紓と蔡元培の論戦は二人の明暗を鮮やかに分かつ分水嶺なのであった。

林紓は、日清戦争における清の敗北後、時局や世情を嘆いて『閩中新樂府』三十二首を著した。<sup>(43)</sup> そのなかの「腐儒を嘆く」という詞書きを持つ「破藍衫」という詩の末尾はこう結ばれている。

時局を救う良策は時宜にかなった変化にある

どうして八股文をいついつまでも大事に守っていてよいことがあろうか。<sup>(44)</sup>

科挙合格に必須の八股文のみを頑なに守ろうとする愚を嘆いたものであるが、林紓自身もまた古文を守株し時代の変化が見えなくなってしまったようだ。

盧軫運、畢尚書、

かつてのこうした人々はいまいずこ

名士よ、名士、まさに道は行き詰まらんとしている<sup>(45)</sup>!

彼がこう詠んだ「知名の士」の姿こそ、まさしく二十年後の自分の姿にはか  
ならなかった。

#### 注

- (1) 郭沫若「我的童年」；1929年4月上海光華書局初版発行。引用は、小野忍・丸山昇訳『郭沫若自伝1 私の幼少年時代 ほか』：平凡社、1967年10月初版、1971年再版、111～2頁。
- (2) 注(1)に同じ。112頁。
- (3) 鄭振鐸「林琴南先生」、1924年11月11日執筆；原載《小説月報》第15巻第11号；薛綏之・張俊才編『中国現代文学史研究資料彙編 林紓研究資料』（福建人民出版社、1982年）所収。163～4頁。
- (4) 嵇復「与熊純如書 八十三」；中国近代人物文集叢書「嵇復集 第三冊 書信」699頁。中華書局、1986年。
- (5) 「学灯、社会主義研究——上海“時事新報”」によれば、「《学灯》及びその他の刊行物は、とりわけ旧式の新開付録と比べれば、明らかに内容がずっと充実しており、思想的にもずっと開けていたので、青年たちから歓迎された」とある。（『五四時期期刊紹介 第三集上冊』272頁。生活・読書・新知三聯書店、1959年12月初版、1979年8月再版）ちなみに、同書によれば、《学灯》は、1918年3月の創刊当時週1回であったものが、5月には週2回、12月には週3回、1919年1月からは日曜日を除く毎日刊行という具合に発行回数が増えている。（『五四時期期刊紹介 第三集上冊』270

頁。)

- (6) 孟真(傅斯年)「破壊」所引による。《新潮》第一卷第二号、1919年2月。合訂本《新潮》349頁。1986年上海書店影印。《新潮》第一卷第三号に掲載された傅斯年「答時事新報記者」中の記載により、この引用部分が張東蓀執筆のものであることがわかる。
- (7) 「文学革命之反響」；《新青年》第四卷第三号、1918年3月。『原刊本影印 新青年第四卷』(汲古書院、1970年)、314～5頁。
- (8) 錢玄同「通信」；《新青年》第三卷第一号、1917年3月。前掲『原刊本影印 新青年第三卷』81頁。
- (9) 胡適「通信」；《新青年》第三卷第三号、1917年5月。前掲『原刊本影印 新青年第三卷』308～9頁。
- (10) 林紓自身は必ずしも同意していないが、世間からは桐城派の古文の大家と目されていた。それゆえ、桐城派に対する批判はとりもなおさず林紓に対する批判でもあった。《新青年》誌上には林紓の名を挙げないまでも、桐城派に対する批判は数多く掲載されている。
- (11) 胡適「建設的文学革命論」；《新青年》第四卷第四号、1918年4月。前掲『原刊本影印 新青年第四卷』359～60頁。
- (12) 林紓の翻訳作品数については諸説あるが、「調査が最も行き届き、考証が最も詳しく、八十年代の研究水準を代表する」(林薇「百年沈浮——林紓研究綜述」86頁；天津教育出版社、1990年)と評価されている馬泰来「林紓翻訳作品全目」に従えば、林紓の翻訳作品は184種にのぼる。錢鍾書等編「林紓の翻訳」(商務印書館、1981年)所収。103頁。なお、林紓については、増田渉「林紓について」(『中国文学史研究』、岩波書店、1967年)に多くを教えられた。また、宮尾正樹「林紓の西洋小説観」(『猫頭鷹』第二号、《新青年》読書会、1983年12月)も大いに参考になった。その他、上記の「百年沈浮——林紓研究綜述」に加えて、朱碧森「女国男兒泪——林琴南伝」(中国文联出版公司、1989年)、孔慶茂「林紓伝」(團結出版社、1998年)などを参照した。
- (13) 増田渉前掲書、217頁。
- (14) 林紓「論古文白話之相消長」；原載《文藝叢刊》、発表年未詳；鄭振鐸編選『中国新文学大系 文学論争集』(上海良友復興圖書公司、1935年初版、1940年第24版)80～81頁。
- (15) 注(14)に同じ。81頁。
- (16) 尾坂徳司「中国新文学運動史」75頁。法政大学出版局、1957年。
- (17) 林紓「荊生」；上海《新申報》1919年2月17、18日。胡適編選『中国新文学大系 建設理論集』(上海良友復興圖書公司、1935年初版、1940年第24版)174～175頁。
- (18) 胡適「紀念「五四」」(原載：《独立評論》第149号、1935年5月5日)に、「大家都明白荊生暗射小徐將軍、——荊徐都是州名。」とある。陳少廷主編「五四運動的回憶」所収。1979年、百傑出版社。
- (19) 徐樹錚については、李宗一「徐樹錚」(『民国人物伝』第一卷、204～7頁。中華書局、1978年)、李振生「安福系の形成及其内幕」(杜春和・林斌生・丘權政編『北洋軍閥史料選輯 下』59～64頁、中国社会科学出版社、1981年)、朱義甯述編「林氏弟子表」7～8頁(朱義甯撰「林琴南先生学行譜記四種」(原題：林畏廬先生学行譜記四種)、世界書局、1965年再版)等を参照した。
- (20) 前掲、朱碧森「女国男兒泪——林琴南伝」269頁。
- (21) 前注に同じ。

- (22) 陳独秀「關於北京大學的謠言」；原載《每周評論》13号、1919年3月16日。『独秀文存』卷一、604頁。亞東圖書館、1922年初版、1934年第十版。
- (23) 陳独秀「林紓的留聲機器」；原載《每周評論》15号、1919年3月30日。前掲『独秀文存』卷二、20頁。なお、周作人も「魯迅与清末文壇」(『魯迅的青年時代』、中国青年出版社、1957年)、「蔡子民(三)」(『知堂回想錄』、三育圖書文具公司、1974年)等の中で、林紓が武力を借りて弾圧しようとしたと回想している。
- (24) 《学灯》1919年3月5日、前掲『五四時期期刊介紹』(第三冊上冊)274頁。
- (25) 鄭振鐸「導言」；前掲『文学論争集』7頁。
- (26) 「附録 本月十八日公言報原文」；《北京大学日刊》1919年3月21日。《北京大学日刊》第三分冊(人民出版社、1981年影印)所収。なお、訳出に当たっては、中国古典文学大系「清末民初政治評論集」(平凡社、1971年)所収の丸山松幸氏の翻訳を参照した。
- (27) ちなみに、孫常雄編『蔡元培先生全集』に収められた蔡元培の返信には、「(林君之函並未直接達達、而僅在公言報發表)」という言葉が加えられている。同書1084頁。台湾商務印書館、1968年初版、1977年第二版。
- (28) 前掲、「論古文白話之相消長」の末尾の林紓の言葉。
- (29) 前掲、「附録 本月十八日公言報原文」；《北京大学日刊》1919年3月21日。
- (30) 魯迅の山上正義あて書簡。1931年3月3日。魯迅自身が日本語で書いたもの。『魯迅全集』第十三巻、457頁。人民文学出版社、1981年。
- (31) 蔡元培の口述伝記である「伝略(上)」(『蔡元培文集 卷一・自伝』118頁、錦繡出版、1995年)では「其父光普、字耀山、為錢莊經理」としているし、蔡元培の晩年、蕭瑜が聞き書きをとった「自述身家軼事」(同上書、174頁)でも「我父親為錢莊經理」と自ら語っており、豆乳売り云々は、林紓が蔡元培を貶めて言っているものであろう。
- (32) ちなみに、魯迅が当時から林蔡の応酬に関心を抱いていたことは当時の書簡から窺え、1919年4月19日付の周作人あて書簡の中でこの件に触れている。(前掲『魯迅全集』第十一巻、361頁。)また、このことが魯迅に強い印象を与えていたことがその後の文中から散見される。(「論照相之類」(1924年)、「『中国文壇の悲観』」(1933年)など。)
- (33) 《公言報》1919年8月7、8日。引用は、王永昌「“引車賣漿者流”指的是誰?」(『魯迅研究百題』117~120頁；湖南人民出版社、1981年)所引による。
- (34) 林紓「妖夢」；原載、上海《新申報》1919年3月18~22日；前掲『中国現代文学史料資料彙編 林紓研究資料』83~85頁。
- (35) 「論語・公冶長第五」の中にも「臧文仲、居蔡」という言葉が見られ、「蔡」といえば大亀を指すことは当時の知識人ならすぐわかることであつたろう。一方、「元緒」については、「水経注・浙江水」に「宵中、樹忽呼龜曰、元緒、奚事爾也」という用例があり、大亀の別名として使われている。『漢語大詞典』；漢語大詞典出版社、1997年。
- (36) 蔡元培は林紓の書簡が公表されたその日のうちに返書をしたためている。
- (37) 「蔡校長致公言報函並附答林琴南君函」；《北京大学日刊》1919年3月21日。なお、当時、学校の答案や新聞の社説は全て文言で書かれていた。
- (38) 当時、安福系の国会議員張元奇は、教育総長及び北京大学校長に対する弾劾案を参議院に提出するなどし、露骨な干渉を加えていた。(王洪・王家勲「五四時期的蔡元培」；胡華主編『五四時期的歷史人物』199頁。中国青年出版社、1979年。)
- (39) 前掲の蔡元培口述伝記「伝略(上)」；『蔡元培文集 卷一・自伝』133頁。
- (40) この林蔡論戦の持つ意味については、拙稿「五四時期的蔡元培」(東京大学《中哲

文学会報》第九号、1984年)でも触れているので参照されたい。

- (41) 王世儒編撰「蔡元培先生年譜 上冊」48頁。北京大学出版社、1998年。
- (42) 林紓「与陳弼庵」：李家驥・李茂蘭・薛祥生整理「林紓詩文選」279頁。商務印書館、1993年。
- (43) 張俊才「林紓年譜簡編」の考証に拠れば、同書は1887年12月福州で刊行されたが、創作時期は1885年の下関条約締結以降という。前掲「中国現代史研究資料彙編 林紓研究資料」22～23頁。
- (44) 林紓「破藍衫」；林薇選注「林紓選集 文詩詞卷」288頁。四川人民出版社、1988年。
- (45) 林紓「知名士」；前注、311頁。なお、林薇の注に拠れば、「盧軫運、畢尚書」は当時つかのまもてはやされた有名人という。